

- 国土審議会 委員名簿
- 国土審議会水資源開発分科会 委員名簿
- 国土交通省設置法（抄）
- 国土審議会令
- 国土審議会運営規則
- 水資源開発分科会における部会設置要綱
- 水資源開発促進法
- 水資源開発基本計画について
- 筑後川水系における水資源開発基本計画の  
定期点検
- 筑後川水系における水資源開発基本計画  
（現行計画）

## ○国土審議会委員名簿（平成23年12月25日時点）

### 1. 衆議院議員のうちから衆議院が指名する者（6人）

市村 浩一郎	衆議院議員
小川 淳也	衆議院議員
小泉 俊明	衆議院議員
中谷 元	衆議院議員
細田 博之	衆議院議員
松崎 哲久	衆議院議員

### 2. 参議院議員のうちから参議院が指名する者（4人）

岩城 光英	参議院議員
佐藤 公治	参議院議員
藤本 祐司	参議院議員
脇 雅史	参議院議員

### 3. 学識経験を有する者（20人以内）

◎岡村 正	(株) 東芝相談役
沖 大幹	東京大学生産技術研究所教授
奥野 信宏	中京大学総合政策学部教授
川勝 平太	静岡県知事
木下 光男	トヨタ自動車(株) 相談役、(社) 中部経済連合会副会長
木村 陽子	財団法人自治体国際化協会理事長
清原 慶子	三鷹市長
小谷部 育子	日本女子大学家政学部教授
崎田 裕子	ジャーナリスト、環境カウンセラー
佐藤 宣子	九州大学大学院農学研究院教授
佐藤 友美子	サントリー文化財団上席研究フェロー
澤田 陽子	全日本自治団体労働組合副中央執行委員長
田崎 史郎	(株) 時事通信社解説委員、政治評論家
西村 幸夫	東京大学先端科学技術研究センター教授
原田 昇	東京大学大学院工学系研究科教授
松下 正幸	パナソニック(株) 代表取締役副会長、(社) 関西経済連合会副会長
御厨 貴	東京大学先端科学技術研究センター教授
宮脇 淳	北海道大学公共政策大学院教授
望月 久美子	(株) 東急住生活研究所上席研究員

(◎会長、○会長代理)

## ○国土審議会水資源開発分科会 委員名簿

### 1. 委員

- ◎ 沖 大幹 東京大学生産技術研究所 教授  
望月 久美子 (株)東急住生活研究所 上席研究員

### 2. 特別委員

- 飯嶋 宣雄 東京水道サービス(株) 代表取締役社長  
楠田 哲也 北九州市立大学国際環境工学部 教授  
佐々木 弘 神戸大学 名誉教授  
清水 義彦 群馬大学大学院工学研究科 教授  
田中 正 筑波大学 特命教授 (筑波大学 名誉教授)  
槇村 久子 京都女子大学現代社会学部 教授  
三野 徹 鳥取環境大学教授 (京都大学名誉教授)  
惠 小百合 江戸川大学社会学部 教授  
山本 和夫 東京大学環境安全研究センター 教授  
(◎分科会長)

## ○国土交通省設置法（平成十一年七月十六日法律第百号）（抄）

### 第三章 本省に置かれる職及び機関

#### 第二節 審議会等

##### 第一款 設置

第六条 本省に、次の審議会等を置く。

国土審議会

社会資本整備審議会

交通政策審議会

運輸審議会

2 (略)

##### 第二款 国土審議会

(所掌事務)

第七条 国土審議会は、次に掲げる事務をつかさどる。

- 一 国土交通大臣の諮問に応じて国土の利用、開発及び保全に関する総合的かつ基本的な政策について調査審議すること。
- 二 国土形成計画法（昭和二十五年法律第二百五号）、国土利用計画法、首都圏整備法（昭和三十一年法律第八十三号）、首都圏近郊緑地保全法（昭和四十一年法律第百一号）、近畿圏整備法（昭和三十八年法律第百二十九号）、近畿圏の近郊整備区域及び都市開発区域の整備及び開発に関する法律（昭和三十九年法律第百四十五号）、近畿圏の保全区域の整備に関する法律（昭和四十二年法律第百三号）、中部圏開発整備法（昭和四十一年法律第百二号）、中部圏の都市整備区域、都市開発区域及び保全区域の整備等に関する法律（昭和四十二年法律第百二号）、北海道開発法（昭和二十五年法律第百二十六号）、土地基本法（平成元年法律第八十四号）、地価公示法、国土調査法（昭和二十六年法律第百八十号）、国土調査促進特別措置法（昭和三十七年法律第百四十三号）、水資源開発促進法（昭和三十六年法律第百十七号）、低開発地域工業開発促進法（昭和三十六年法律第百十六号）及び豪雪地帯対策特別措置法の規定によりその権限に属させられた事項を処理すること。

(組織)

第八条 国土審議会は、次に掲げる者につき国土交通大臣が任命する委員三十人以内で組織する。

- 一 衆議院議員のうちから衆議院が指名する者 六人
  - 二 参議院議員のうちから参議院が指名する者 四人
  - 三 学識経験を有する者 二十人以内
- 2 前項第三号に掲げる者につき任命される委員の任期は、三年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 委員は、再任されることができる。
- 4 委員は、非常勤とする。

(会長)

第九条 国土審議会に、会長を置き、委員の互選により選任する。

2 会長は、会務を総理し、国土審議会を代表する。

3 国土審議会は、あらかじめ、会長に事故があるときにその職務を代理する委員を定めておかなければならない。

(特別委員)

第十条 特別の事項を調査審議させるため、国土審議会に特別委員を置くことができる。

2 特別委員は、国会議員、当該特別の事項に関係のある地方公共団体の長及び議会の議長並びに当該特別の事項に関し学識経験を有する者のうちから、国土交通大臣が任命する。

3 特別委員は、その者の任命に係る当該特別の事項に関する調査審議が終了したときは、解任されるものとする。

4 第八条第四項の規定は、特別委員に準用する。

(資料提出の要求等)

第十一条 国土審議会は、その所掌事務を処理するため必要があると認めるときは、関係行政機関の長、関係地方公共団体の長その他の関係者に対し、資料の提出、意見の開陳、説明その他の必要な協力を求めることができる。

(政令への委任)

第十二条 この款に定めるもののほか、国土審議会の組織及び所掌事務その他国土審議会に関し必要な事項は、政令で定める。

附 則 (抄)

(施行期日)

第一条 この法律は、内閣法の一部を改正する法律(平成十一年法律第八十八号)の施行の日〔平成十三年一月六日〕から施行する。ただし、附則第六条の規定は、公布の日から施行する。

(国土審議会の所掌事務の特例)

第五条 国土審議会は、第七条各号に掲げる事務をつかさどるほか、次の表の上欄に掲げる日までの間、それぞれ同表の下欄に掲げる法律の規定によりその権限に属させられた事項を処理する。

期 限	法 律
平成二十四年三月三十一日	特殊土壌地帯災害防除及び振興臨時措置法
平成二十五年三月三十一日	離島振興法
平成二十七年三月三十一日	山村振興法
	半島振興法
総合的な国土の形成を図るための国土総合開発法等の一部を改正する等の法律(平成十	総合的な国土の形成を図るための国土総合開発法等の一部を改正する等の法律附則第六条の規定によりなおその効力を有するものとされる旧東北開発促進法(昭

七年法律第八十九号) 附則第六條に規定する日	和三十二年法律第一百十号)、旧九州地方開発促進法(昭和三十四年法律第六十号)、旧四国地方開発促進法(昭和三十五年法律第六十三号)、旧北陸地方開発促進法(昭和三十五年法律第七十一号)及び旧中国地方開発促進法(昭和三十五年法律第七十二号)
------------------------	---

## ○ 国土審議会令（平成十二年六月七日政令第二百九十八号）

（専門委員）

第一条 国土審議会（以下「審議会」という。）に、専門の事項を調査させるため必要があるときは、専門委員を置くことができる。

2 専門委員は、当該専門の事項に関し学識経験のある者のうちから、国土交通大臣が任命する。

3 専門委員は、その者の任命に係る当該専門の事項に関する調査が終了したときは、解任されるものとする。

4 専門委員は、非常勤とする。

（分科会）

第二条 審議会に、次の表の上欄に掲げる分科会を置き、これらの分科会の所掌事務は、審議会の所掌事務のうち、それぞれ同表の下欄に掲げる法律の規定により審議会の権限に属させられた事項を処理することとする。

名称	法律の規定
土地政策分科会	国土利用計画法（昭和四十九年法律第九十二号）第十三条第二項
	土地基本法（平成元年法律第八十四号）第十条第三項及び第十九条
	地価公示法（昭和四十四年法律第四十九号）第二十六条の二
	国土調査法（昭和二十六年法律第百八十号）第十二条
	国土調査促進特別措置法（昭和三十七年法律第百四十三号）第三条第六項において読み替えて準用する同条第一項
北海道開発分科会	北海道開発法（昭和二十五年法律第百二十六号）第四条
水資源開発分科会	水資源開発促進法（昭和三十六年法律第二百十七号）第三条第一項、第四条第一項（同条第五項において準用する場合を含む。）並びに第六条第一項及び第二項
豪雪地帯対策分科会	豪雪地帯対策特別措置法（昭和三十七年法律第七十三号）第二条第一項及び第二項、第三条第一項（同条第四項において準用する場合を含む。）並びに第五条

2 前項の表の上欄に掲げる分科会に属すべき委員及び特別委員は、国土交通大臣が指名する。

3 分科会に属すべき専門委員は、会長が指名する。

4 分科会に、分科会長を置く。分科会長は、当該分科会に属する委員のうちから当該分科会に属する委員及び特別委員がこれを選挙する。

5 分科会長は、当該分科会の事務を掌理する。

6 分科会長に事故があるときは、当該分科会に属する委員又は特別委員のうちから分科会長があらかじめ指名する者が、その職務を代理する。

7 審議会は、その定めるところにより、分科会の議決をもって審議会の議決とすることができる。

（部会）

第三条 審議会及び分科会は、その定めるところにより、部会を置くことができる。

- 2 部会に属すべき委員、特別委員及び専門委員は、会長（分科会に置かれる部会にあつては、分科会長）が指名する。
- 3 部会に、部会長を置き、当該部会に属する委員及び特別委員の互選により選任する。
- 4 部会長は、当該部会の事務を掌理する。
- 5 部会長に事故があるときは、当該部会に属する委員又は特別委員のうちから部会長があらかじめ指名する者が、その職務を代理する。

（幹事）

第四条 審議会に、幹事を置く。

- 2 幹事は、関係行政機関の職員のうちから、国土交通大臣が任命する。
- 3 幹事は、審議会の所掌事務について、委員を補佐する。
- 4 幹事は、非常勤とする。

（議事）

第五条 審議会は、委員及び議事に関係のある特別委員の二分の一以上が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。

- 2 審議会の議事は、委員及び議事に関係のある特別委員で会議に出席したものの過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。
- 3 前二項の規定は、分科会及び部会の議事に準用する。

（庶務）

第六条 審議会の庶務は、国土交通省国土計画局総務課において総括し、及び処理する。ただし、次の表の上欄に掲げる分科会に係るものについては、それぞれ同表の下欄に掲げる課において処理する。

分科会	課
土地政策分科会	国土交通省土地・水資源局総務課
北海道開発分科会	国土交通省北海道局総務課
水資源開発分科会	国土交通省土地・水資源局水資源部水資源政策課
豪雪地帯対策分科会	国土交通省都市・地域整備局地方整備課

（雑則）

第七条 この政令に定めるもののほか、議事の手続その他審議会の運営に関し必要な事項は、会長が審議会に諮って定める。

附 則

（施行期日）

第一条 この政令は、内閣法の一部を改正する法律（平成十一年法律第八十八号）の施行の日〔平成十三年一月六日〕から施行する。

（分科会の特例）

第二条 審議会に、第二条第一項の表の上欄に掲げる分科会のほか、次の表の期限の欄に掲げる日までの間、それぞれ同表の分科会の欄に掲げる分科会を置き、これらの分



科会の所掌事務は、審議会の所掌事務のうち、それぞれ同表の法律の規定の欄に掲げる法律の規定により審議会の権限に属させられた事項を処理することとし、これらの分科会の庶務は、それぞれ同表の課の欄に掲げる課において処理する。この場合において、同条第二項中「前項の表の上欄」とあるのは、「前項の表の上欄及び附則第二条第一項の表の分科会の欄」と読み替えるものとする。

期 限	分科会	法律の規定	課
平成二十四年 三月三十一日	特殊土壌地 帯対策分科 会	特殊土壌地帯災害防除及び 振興臨時措置法（昭和二十 七年法律第九十六号）第二 条第一項、第三条第一項及 び第五条	国土交通省都市・地域整 備局地方整備課
平成二十五年 三月三十一日	離島振興対 策分科会	離島振興法（昭和二十八年 法律第七十二号）第二条第 一項、第三条第三項（同条 第五項において準用する 場合を含む。）及び第二十 一条	国土交通省都市・地域整 備局離島振興課
平成二十七年 三月三十一日	山村振興対 策分科会	山村振興法（昭和四十年法 律第六十四号）第七条第一 項及び第二十二條	国土交通省都市・地域整 備局地方整備課

- 2 前項の場合において、山村振興対策分科会及び特殊土壌地帯対策分科会の庶務は、農林水産省農村振興局企画部農村政策課の協力を得て処理するものとする。

## ○国土審議会運営規則

(趣旨)

第1条 国土審議会（以下「審議会」という。）の議事の手続その他審議会の運営に関し必要な事項は、国土交通省設置法（平成11年法律第100号）及び国土審議会令（平成12年政令第298号）に規定するもののほか、この規則の定めるところによる。

(招集)

第2条 審議会の会議は、会長（会長が選任されるまでは、国土交通大臣）が招集する。

2 前項の場合においては、委員並びに議事に関係のある特別委員及び専門委員に対し、あらかじめ、会議の日時、場所及び調査審議事項を通知しなければならない。

(書面による議事)

第3条 会長は、やむを得ない理由により審議会の会議を開く余裕のない場合においては、事案の概要を記載した書面を委員及び議事に関係のある特別委員に送付し、その意見を徴し、又は賛否を問い、その結果をもって審議会の議決に代えることができる。

(会議の議事)

第4条 会長は、審議会の会議の議長となり、議事を整理する。

2 会長は、審議会の会議の議事について、議事録を作成する。

(議事の公開)

第5条 会議又は議事録は、速やかに公開するものとする。ただし、特段の理由があるときは、会議及び議事録を非公開とすることができる。

2 前項ただし書の場合においては、その理由を明示し、議事要旨を公開するものとする。

3 前2項の規定にかかわらず、会議、議事録又は議事要旨の公開により当事者若しくは第三者の権利若しくは利益又は公共の利益を害するおそれがあるときは、会議、議事録又は議事要旨の全部又は一部を非公開とすることができる。

(分科会への意見聴取)

第6条 会長は、審議会の議決に関し、必要があると認めるときは、関係する分科会（第7条第1項の付託に係る分科会の上申について議決を行う場合には、当該分科会を除く。）に意見を聴くものとする。

(分科会)

第7条 会長は、分科会の所掌事務に関して諮問を受けた場合には、調査審議事項を当該分科会に付託するものとする。ただし、やむを得ない理由により分科会に付託することができないときは、この限りでない。

2 分科会の議決は、会長の同意を得て、審議会の議決とする。

- 3 会長は、前項の議決に関し、国土の利用、開発及び保全に関する総合的かつ基本的な政策又は他の分科会の所掌事務との調整を必要とすると認める場合を除き、同項の同意をするものとする。
- 4 会長は、第2項の同意をしたときは、必要に応じて、当該同意に係る議決を審議会に報告するものとする。
- 5 第2条から第5条までの規定は、分科会の議事に準用する。この場合において、これらの規定中「会長」とあるのは「分科会長」と、第2条第1項中「国土交通大臣」とあるのは「会長」と読み替えるものとする。

(部会)

- 第8条 会長（分科会に置かれる部会にあっては分科会長）は、必要があると認める場合には、調査審議事項を部会に付託することができる。
- 2 第2条から第5条までの規定は、部会の議事に準用する。この場合において、これらの規定中「会長」とあるのは「部会長」と、第2条第1項中「国土交通大臣」とあるのは「審議会に置かれる部会にあっては会長、分科会に置かれる部会にあっては分科会長」と読み替えるものとする。

(雑則)

- 第9条 この規則に定めるもののほか、審議会、分科会又は部会の議事の手続その他審議会、分科会又は部会の運営に関し必要な事項は、それぞれ会長、分科会長又は部会長が定める。

附則（平成13年3月15日国土審議会決定）

この規則は、平成13年3月15日から施行する。

附則（平成17年12月16日国土審議会決定）

改正後のこの規則は、総合的な国土の形成を図るための国土総合開発法等の一部を改正する等の法律の施行に伴う関係政令の整備に関する政令（平成17年政令第375号）の施行の日から施行する。

## ○水資源開発分科会における部会設置要綱

平成 1 3 年 8 月 2 1 日  
第 1 回水資源開発分科会決定

### (設置)

1. 国土審議会令（平成 1 2 年政令第 2 9 8 号）第 3 条第 1 項の規定に基づき、水資源開発分科会（以下「分科会」という。）に利根川・荒川部会、豊川部会、木曽川部会、淀川部会、吉野川部会、筑後川部会及び調査企画部会（以下「各部会」という。）を置く。

### (任務)

2. 利根川・荒川部会は利根川水系及び荒川水系における水資源開発基本計画（以下「基本計画」という。）について、豊川部会は豊川水系における基本計画について、木曽川部会は木曽川水系における基本計画について、淀川部会は淀川水系における基本計画について、吉野川部会は吉野川水系における基本計画について、筑後川部会は筑後川水系における基本計画について、調査企画部会は各水系の基本計画に共通する事項等について調査審議し、その結果を分科会に報告する。

### (庶務)

3. 各部会の庶務は、国土交通省土地・水資源局水資源部水資源政策課において処理する。

### (雑則)

4. この要綱に定めるもののほか、各部会の議事及び運営に関し必要な事項は、部会長が定める。

### (附則)

この要綱は平成 1 3 年 8 月 2 1 日から施行する。

## ○水資源開発促進法（昭和三十六年十一月十三日法律第二百十七号）

### （目的）

第一条 この法律は、産業の開発又は発展及び都市人口の増加に伴い用水を必要とする地域に対する水の供給を確保するため、水源の保全かん養と相まって、河川の水系における水資源の総合的な開発及び利用の合理化の促進を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的とする。

### （基礎調査）

第二条 政府は、次条第一項の規定による水資源開発水系の指定及び第四条第一項の規定による水資源開発基本計画の決定のため必要な基礎調査を行なわなければならない。

- 2 国土交通大臣は、前項の規定により行政機関の長が行なう基礎調査について必要な調整を行ない、当該行政機関の長に対し、その基礎調査の結果について報告を求めることができる。

### （水資源開発水系の指定）

第三条 国土交通大臣は、第一条に規定する地域について広域的な用水対策を緊急に実施する必要があると認めるときは、厚生労働大臣、農林水産大臣、経済産業大臣その他関係行政機関の長に協議し、かつ、関係都道府県知事及び国土審議会の意見を聴いて、当該地域に対する用水の供給を確保するため水資源の総合的な開発及び利用の合理化を促進する必要がある河川の水系を水資源開発水系として指定する。

- 2 厚生労働大臣、農林水産大臣又は経済産業大臣は、それぞれの所掌事務に関し前項に規定する必要があると認めるときは、国土交通大臣に対し、水資源開発水系の指定を求めることができる。
- 3 国土交通大臣が水資源開発水系の指定をするには、閣議の決定を経なければならない。
- 4 国土交通大臣は、水資源開発水系の指定をしたときは、これを公示しなければならない。

### （水資源開発基本計画）

第四条 国土交通大臣は、水資源開発水系の指定をしたときは、厚生労働大臣、農林水産大臣、経済産業大臣その他関係行政機関の長に協議し、かつ、関係都道府県知事及び国土審議会の意見を聴いて、当該水資源開発水系における水資源の総合的な開発及び利用の合理化の基本となるべき水資源開発基本計画（以下「基本計画」という。）を決定しなければならない。

- 2 国土交通大臣が基本計画の決定をするには、閣議の決定を経なければならない。
- 3 基本計画には、治山治水、電源開発及び当該水資源開発水系に係る後進地域の開発について十分な考慮が払われていなければならない。
- 4 国土交通大臣は、基本計画を決定したときは、これを公示しなければならない。
- 5 前四項の規定は、基本計画を変更しようとするときに準用する。

- 6 厚生労働大臣、農林水産大臣又は経済産業大臣は、それぞれの所掌事務に関し必要があると認めるときは、国土交通大臣に対し、基本計画の変更を求めることができる。

第五条 基本計画には、次の事項を記載しなければならない。

- 一 水の用途別の需要の見とおし及び供給の目標
- 二 前号の供給の目標を達成するため必要な施設の建設に関する基本的な事項
- 三 その他水資源の総合的な開発及び利用の合理化に関する重要事項

(国土審議会の調査審議等)

第六条 国土審議会は、国土交通大臣の諮問に応じ、水資源開発水系及び基本計画に関する重要事項について調査審議する。

- 2 国土審議会は、前項に規定する重要事項について、国土交通大臣又は関係行政機関の長に対し、意見を申し出ることができる。
- 3 関係行政機関の長は、第一項に規定する重要事項について、国土審議会の会議に出席して、意見を述べることができる。

第七条から第十一条まで 削除

(基本計画に基づく事業の実施)

第十二条 基本計画に基づく事業は、当該事業に関する法律（これに基づく命令を含む。）の規定に従い、国、地方公共団体、独立行政法人水資源機構その他の者が実施するものとする。

(基本計画の実施に要する経費)

第十三条 政府は、基本計画を実施するために要する経費については、必要な資金の確保その他の措置を講ずることに努めなければならない。

(損失の補償等)

第十四条 基本計画に基づく事業を実施する者は、当該事業により損失を受ける者に対する措置が公平かつ適正であるように努めなければならない。

附 則 抄

(施行期日)

- 1 この法律は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和三八年七月一〇日法律第一二九号) 抄

(施行期日)

- 1 この法律は、公布の日から施行する。

附 則 (昭和四〇年六月二九日法律第一三八号) 抄

(施行期日)

1 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。そぞし、次の各号に掲げる規定は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

一及び二 略

三 附則第五項及び附則第七項から第十項までの規定

附 則 （昭和四一年七月一日法律第一〇二号） 抄  
（施行期日）

1 この法律は、公布の日から施行する。

附 則 （昭和四九年六月二六日法律第九八号） 抄  
（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から施行する。

（経過措置）

第五十五条 従前の首都圏整備委員会の首都圏整備審議会及びその委員、建設省の土地鑑定委員会並びに その委員長、委員及び試験委員、自治省の奄美群島振興開発審議会並びにその会長及び委員並びに自治省の小笠原諸島復興審議会並びにその会長、委員及び特別 委員は、それぞれ総理府又は国土庁の相当の機関及び職員となり、同一性をもつて存続するものとする。

附 則 （昭和五三年五月二三日法律第五五号） 抄  
（施行期日等）

1 この法律は、公布の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 略

二 第一条（台風常襲地帯対策審議会に係る部分を除く。）及び第六条から第九条までの規定、第十条中奄美群島振興開発特別措置法第七条第一項の改正規定並びに第十一条、第十二条及び第十四条から第三十二条までの規定 昭和五十四年三月三十一日までの間において政令で定める日

（経過措置）

3 従前の総理府の国土利用計画審議会並びにその会長、委員及び臨時委員、水資源開発審議会並びにその会長、委員及び専門委員、奄美群島振興開発審議会並びにその会長及び委員並びに小笠原諸島復興審議会並びにその会長及び委員は、それぞれ国土庁の相当の機関及び職員となり、同一性をもつて存続するものとする。

附 則 （昭和五八年一二月二日法律第七八号）

1 この法律（第一条を除く。）は、昭和五十九年七月一日から施行する。

2 この法律の施行の日の前日において法律の規定により置かれている機関等で、この法律の施行の日以後は国家行政組織法又はこの法律による改正後の関係法律の規定に基づく政令（以下「関係政令」という。）の規定により置かれることとなるものに関し必要となる経過措置その他この法律の施行に伴う関係政令の制定又は改廃に関し必要となる経過措置は、政令で定めることができる。

附 則 （平成一一年七月一六日法律第一〇二号） 抄

（施行期日）

第一条 この法律は、内閣法の一部を改正する法律（平成十一年法律第八十八号）の施行の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

二 附則第十条第一項及び第五項、第十四条第三項、第二十三条、第二十八条並びに第三十条の規定 公布の日

（職員の身分引継ぎ）

第三条 この法律の施行の際現に従前の総理府、法務省、外務省、大蔵省、文部省、厚生省、農林水産省、通商産業省、運輸省、郵政省、労働省、建設省又は自治省（以下この条において「従前の府省」という。）の職員（国家行政組織法（昭和二十三年法律第百二十号）第八条の審議会等の会長又は委員長及び委員、中央防災会議の委員、日本工業標準調査会の会長及び委員並びにこれらに類する者として政令で定めるものを除く。）である者は、別に辞令を発せられない限り、同一の勤務条件をもって、この法律の施行後の内閣府、総務省、法務省、外務省、財務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省若しくは環境省（以下この条において「新府省」という。）又はこれに置かれる部局若しくは機関のうち、この法律の施行の際現に当該職員が属する従前の府省又はこれに置かれる部局若しくは機関の相当の新府省又はこれに置かれる部局若しくは機関として政令で定めるものの相当の職員となるものとする。

（別に定める経過措置）

第三十条 第二条から前条までに規定するもののほか、この法律の施行に伴い必要となる経過措置は、別に法律で定める。

附 則 （平成一一年一二月二二日法律第一六〇号） 抄

（施行期日）

第一条 この法律（第二条及び第三条を除く。）は、平成十三年一月六日から施行する。

附 則 （平成一四年一二月一八日法律第一八二号） 抄

（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 附則第六条から第十三条まで及び第十五条から第二十六条までの規定 平成十五年十月一日



## ○水資源開発基本計画について

### (1) 水資源開発促進法及び水資源開発基本計画の概要

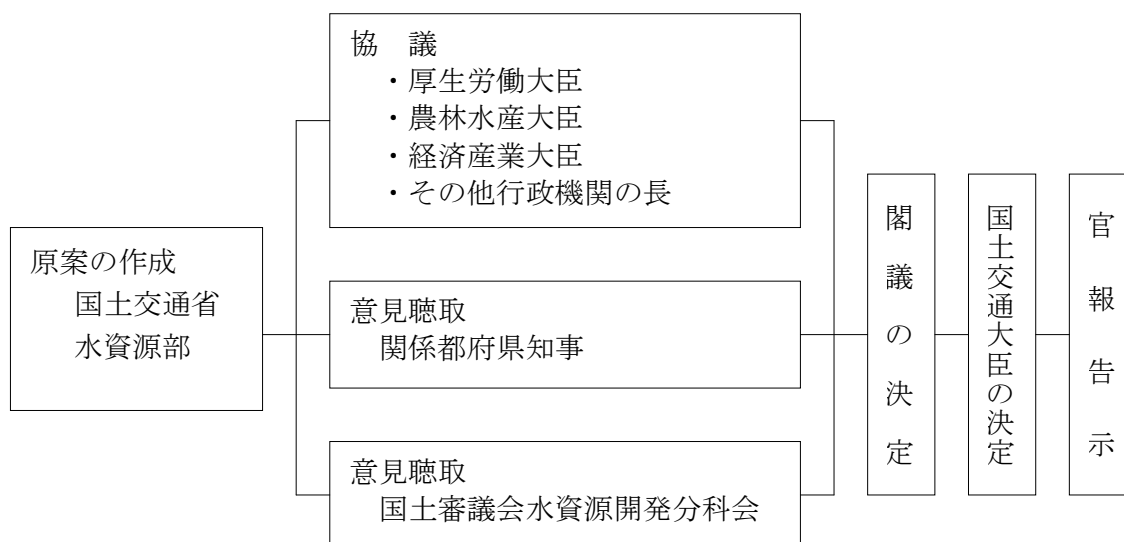
昭和36年に制定された水資源開発促進法では、産業の開発又は発展及び都市人口の増加に伴い用水を必要とする地域において、広域的な用水対策を緊急に実施する必要がある場合に、その地域に対する用水の供給を確保するために必要な水系を水資源開発水系（以下、「指定水系」という。）として指定し、当該地域（以下、「フルプラン地域」という。）における水資源開発基本計画（以下、「フルプラン」という。）を定めることとされている。

指定水系は、国土交通大臣が厚生労働大臣、農林水産大臣、経済産業大臣その他関係行政機関の長に協議し、かつ、関係都道府県知事及び国土審議会の意見を聴いて、閣議の決定を経て指定される。また、フルプランについても、同様の手続きにより決定、変更される。

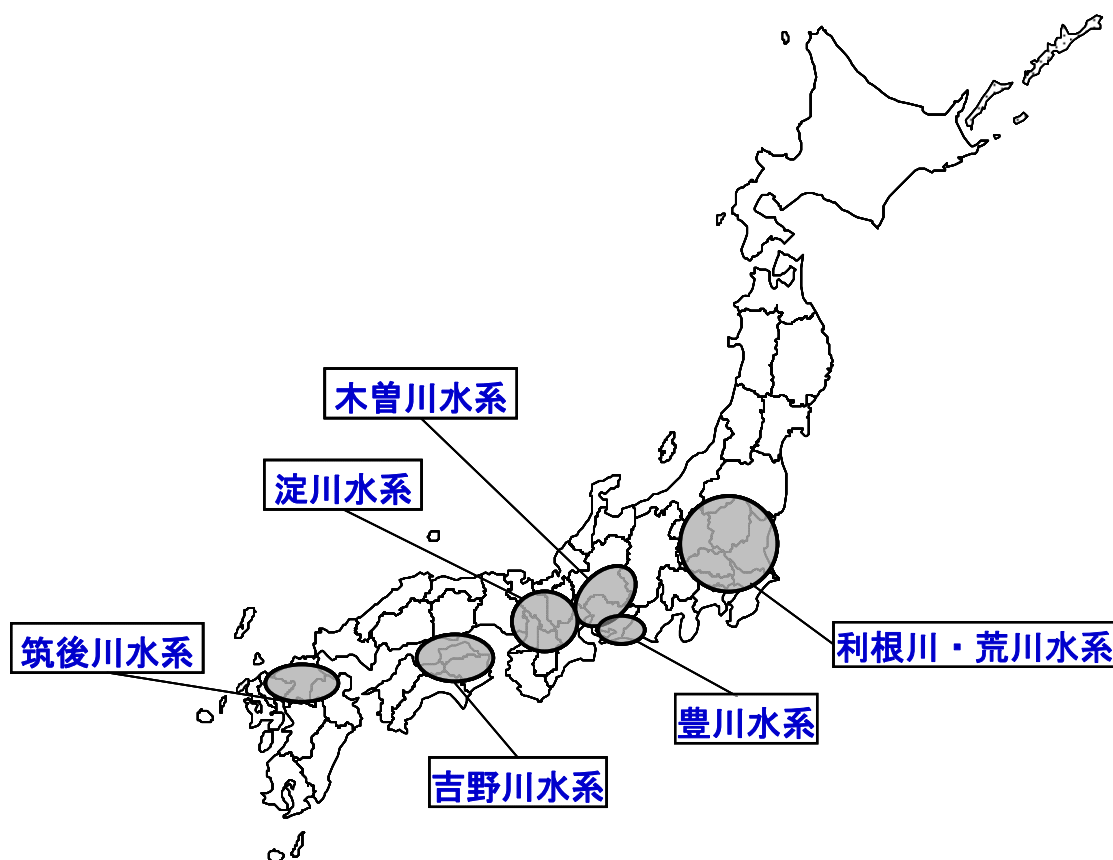
現在、指定水系は7水系（利根川、荒川、豊川、木曾川、淀川、吉野川、筑後川）であり、利根川水系と荒川水系を一緒にして6つのフルプランが決定されている。

また、フルプランには、①水の用途別の需要の見通し及び供給の目標、②供給の目標を達成するため必要な施設の建設に関する基本的な事項、③その他水資源の総合的な開発及び利用の合理化に関する重要事項の3つを記載することとされている。

### ○水資源開発基本計画の策定手続き



○水資源開発水系



(2) 水資源開発基本計画の変更に関するこれまでの経緯

平成13年1月の省庁再編後の、国土審議会水資源開発分科会及び各部会、変更の閣議決定の経緯は以下のとおり。

水資源開発分科会及び変更の閣議決定

			議事内容
平成13年	8月21日	水資源開発分科会 (第1回)	利根川・荒川水系の一部変更 淀川水系の一部変更 (平成13年9月14日閣議決定)
平成13年	12月13日	水資源開発分科会 (第2回)	吉野川水系の全部変更 (平成14年2月15日閣議決定)
平成14年	10月31日	水資源開発分科会 (第3回)	利根川・荒川水系の一部変更 (平成14年12月10日閣議決定)
平成16年	5月31日	水資源開発分科会 (第4回)	木曾川水系の全部変更 (平成16年6月15日閣議決定)
平成17年	3月24日	水資源開発分科会 (第5回)	筑後川水系の全部変更 (平成17年4月15日閣議決定)
平成18年	2月3日	水資源開発分科会 (第6回)	豊川水系の全部変更 (平成18年2月17日閣議決定)
平成19年	12月13日	水資源開発分科会	利根川・荒川水系の全部変更

	(第7回)	(平成20年7月4日閣議決定)
平成20年 3月 18日	水資源開発分科会 (第8回)	豊川水系の一部変更 木曽川水系の一部変更 (平成20年6月3日閣議決定)
平成20年 6月 30日	水資源開発分科会 (第9回)	淀川水系の全部変更 (平成21年4月17日閣議決定)
平成21年 1月 23日	水資源開発分科会 (第10回)	利根川・荒川水系の一部変更 木曽川水系の一部変更 (平成21年3月27日閣議決定)

各部会

		利	豊	木	淀	吉	筑	調
平成13年 10月 19日	第1回吉野川部会					○		
11月 9日	第2回吉野川部会					○		
平成14年 1月 23日	第1回利根川・荒川部会	○						
5月 9日	第2回利根川・荒川部会	○						
5月 21日	第1回淀川部会				○			
10月 16日	第3回利根川・荒川部会	○						
10月 31日	第2回淀川部会				○			
11月 8日	第1回豊川部会		○					
平成15年 3月 27日	第1回筑後川部会						○	
7月 4日	第1回木曽川部会			○				
平成16年 4月 13日	第2回木曽川部会			○				
5月 12日	第3回木曽川部会			○				
平成17年 2月 10日	第2回筑後川部会						○	
3月 15日	第3回筑後川部会						○	
12月 8日	第2回豊川部会		○					
平成18年 1月 19日	第3回豊川部会		○					
平成19年 6月 18日	第4回利根川・荒川部会	○						
8月 9日	第5回利根川・荒川部会	○						
10月 31日	第6回利根川・荒川部会	○						
11月 26日	第3回淀川部会				○			
平成20年 2月 25日	第4回淀川部会				○			
3月 6日	第4回豊川部会 第4回木曽川部会		○	○				
3月 7日	第1回調査企画部会							○
3月 18日	第2回調査企画部会							○
4月 24日	第5回淀川部会				○			
6月 6日	第3回調査企画部会							○
6月 13日	第6回淀川部会				○			
6月 17日	第3回吉野川部会					○		
6月 27日	第4回調査企画部会							○

			利	豊	木	淀	吉	筑	調
	8月 1日	第5回調査企画部会							○
	8月 29日	第6回調査企画部会							○
	12月 11日	第7回利根川・荒川部会	○						
平成21年	1月 15日	第5回木曾川部会			○				
	1月 23日	第4回吉野川部会					○		
	6月 19日	第5回吉野川部会					○		
平成22年	5月 25日	第6回木曾川部会			○				
	6月 17日	第7回木曾川部会			○				
	8月 27日	第8回木曾川部会			○				
	12月 2日	第4回筑後川部会						○	
	12月 21日	第5回筑後川部会						○	
平成23年	2月 21日	第6回筑後川部会						○	
	5月 18日	第7回筑後川部会						○	
平成24年	3月 19日	第5回豊川部会		○					
	10月 15日	第8回筑後川部会						○	

平成23年6月

筑後川水系における水資源開発基本計画の点検について

国土審議会水資源開発分科会筑後川部会

筑後川水系における水資源開発基本計画（フルプラン）は、平成17年4月に全部変更が行われ、概ね5年を経過したことから、当部会において、平成22年12月から4回にわたり、その点検に関する調査・審議を行ったので、別紙のとおり意見を提出する。

### ○ 筑後川に関する意見

1. 水道用水及び工業用水については、今回の点検においても、各県の水利用の計画は現行フルプラン策定時から変わらないことを確認した。なお、最大取水量の実績は現行フルプランの将来需要想定（平成27年度時点）の範囲内に収まっているが、近年横ばいから減少の傾向であることから、次期フルプラン策定に向けて、使用状況の動向を調査し、利水者の政策的要素を勘案した上で、より正確な需要予測が行えるように検討を行うこと。
2. 筑後大堰の魚類等の遡上状況について、専門家等の意見を踏まえて今後も調査・分析していくことが必要である。
3. 白石平野では、地盤沈下抑制の観点において、地下水から地表水への早期転換が必要である。
4. 河川水だけに頼るのではなく、地域性を考えながら雨水・再生水・海水の利用を図る必要がある。
5. 流域外の利水者が流域に対して負担や貢献をしていることを見えるようにする必要があり。

### ○ 既存施設のストックマネジメント関係

6. 安定的な水の供給を確保する上で、今後は既存施設のストックマネジメント（定期的な点検、適切な維持管理等）や、水資源施設の効率的な運用を行うていくことが重要である。

### ○ 危機管理関係

7. 災害リスクに対しては、災害が起こる前に対処を考えることが重要である。例えば、災害対策については、耐震化だけではなく水供給経路の複数化を図っていくべきである。

### ○ 気候変動関係

8. 地球温暖化に伴い、洪水や渇水の発生頻度の増加が懸念されることから、流量予測精度の向上に努めるとともに、治水・利水両面でダムの効力が発揮できるような弾力的な運用を図る必要がある。

### ○ 地下水、地盤沈下関係

9. 地下水の利用にあたって、水量・水質・地盤沈下状況等を考慮した上で、地表水と併せた一体的な管理に向けて検討していくことが必要である。
10. 地下水を取水する場合、地下水を公水（公共の水）として捉え、地域への還元や社会貢献、水道事業の維持管理費の負担なども考えていくべきである。
11. 地盤沈下地域では、沈下抑制の観点において、地下水から地表水への早期転換が必要である。
12. 地下水に含まれる硝酸態窒素や有機溶媒による水質の悪化が問題である。

### ○ 雨水・再生水利用関係

13. 雨水・再生水・海水淡水化は補助水源として捉え、ダムなどの基幹水源とは分けて考えていく必要がある。

## ○ 農業・食料自給関係

14. 気候変動による渇水の発生や蒸発散の増加による利用できる水量の減少、さらに、日本の食料自給率の向上のため、農業用水の確保は必要であり、さらに増やしていくことも検討していくべきではないか。
15. 農業用水は環境用水・地域の風土維持としても必要である。
16. 農業用水については、節水などの努力をいかに「見える化」していくかが重要である。
17. 日本の農業生産を維持していくためには、都市と農村が協力して農業用水施設の維持管理負担の軽減を図っていく必要がある。

## ○ 環境関係

18. 河川の環境維持用水は重要である。また、流域住民の河川環境への関心の高まりにより、河川の環境維持用水がこれまで以上に必要となることが予想されるので、今後、水利用が制限されることも考慮していく必要がある。
19. 水産業等に対して、水資源をさらに役立てていくことも考えていくべきではないか。

## ○ 節水関係

20. 節水について、例えば節水コマを推進するなどのハード対策だけではなく、渇水ピークを緩和させるために適切な情報を提供するなどのソフト対策を行っていくことが重要である。
21. 水は豊かな時は使ってもよいが、渇水時は困らないように備えておくことも重要である。
22. 水の循環利用や節水を過度に進めると、平常時における水使用量は減り、水道単価は上がる可能性があることも考慮する必要がある。

## ○ 情報共有・『見える化（可視化）』関係

23. 最近、人々は上水道が便利に使えるので、その源の河川に思いが至らない傾向が見られることから、水源地域の役割についての認識を高めていくことが必要である。
24. 水資源や水源地域の役割について認識を高めるため、これらに関する情報を一般市民にいかに見えるようにしていくかが重要である。
25. 水系の個性を明らかにし、みんなで情報を共有しながら親しみや関心を喚起することで、水資源を大切に使うよう動機づけていくことが必要である。
26. 気候変動により供給能力が低下することについてわかりやすく説明すべきである。

## ○ その他

27. ローカリティ（流域や地域の実情）という観点から、地域特性に応じて政策を考える必要がある。
28. 水は公共財と私財の両面を持っていることについて認識を高めるべきである。
29. フルプランエリア内の他水系の水需給についても把握するべきである。
30. 利水安全度を高めていくことを検討していく必要があるのではないか。
31. 施設の更新の際にダムの嵩上げなど、施設の機能アップについても検討していくべきではないか。
32. 水道、工業、農業の慣行水利権の取り扱いを検討すべきではないか。

国土審議会水資源開発分科会筑後川部会

- 飯嶋 宣雄 東京水道サービス(株) 代表取締役社長
- 折坂 章子 日本気象協会事業本部営業部お客様サービス課 課長
- 楠田 哲也 北九州市立大学国際環境工学部 教授
- 黒田 正治 九州大学 名誉教授
- 小松 利光 九州大学大学院工学研究院 教授
- 神野 健二 九州大学 名誉教授
- 田中 正 筑波大学シニア・アドバイザー (筑波大学 名誉教授)
- 三浦 哲彦 (株)軟弱地盤研究所 所長
- 水谷 守男 福岡大学 名誉教授
- 恵 小百合 江戸川大学社会学部 教授
- 山本 和夫 東京大学環境安全研究センター 教授



筑後川水系における水資源開発基本計画  
定期点検とりまとめ

平成23年6月  
国土交通省土地・水資源局水資源部

国土交通省では、水資源開発基本計画（以下、「フルプラン」という。）を策定又は、全部変更してから概ね5年を目途に点検を行うこととしている。

今般、筑後川水系フルプラン（平成17年4月全部変更、以下、「現行フルプラン」という。）について、国土審議会水資源開発分科会筑後川部会における調査・審議を経て、以下のとおり定期点検を行った。

## I 現行フルプランの点検

現行フルプランの計画事項に沿った点検は次のとおりである。

### 1 需要の見通し及び供給の目標について

#### (1) 「需要の見通し」について

水道用水に関しては、現行フルプラン策定後（現行フルプラン策定時に使用したデータ以降の平成15年度～平成19年度）における主な指標を見ると、給水人口、家庭用水有収水量の原単位（一人一日平均使用水量）、一日平均取水量等は微増を示しているが、一日最大取水量は、横ばいの傾向が見られる。

工業用水に関しては、現行フルプラン策定後（現行フルプラン策定時に使用したデータ以降の平成15年度～平成19年度）における主な指標を見ると、工業出荷額は平成15年度以降増加しており、平成27年度の想定値を超える勢いを示しているが、工業用水使用水量、補給水量、最大取水量は、横ばいから減少の傾向を示している。

農業用水に関しては、両筑平野用水事業、筑後川下流用水事業の年間総取水量を見ると、増加の傾向を示している。

#### (2) 「供給の目標」について

筑後川水系の計画供給量は、昭和30年から昭和39年までのデータを基に10年に1度程度発生する降雨の少ない年において、供給量を確保できるよう計画しているが、現行フルプランでは近年の少雨化傾向により、供給量が減少していることから、昭和54年から平成10年までの20年間のデータを基に算定した供給量のうち20年で2番目に少ない年（平成7～8年）の供給量を安定供給可能量として設定している。

今回の点検では、さらに、平成11年から平成19年までの9年間分のデータを追加して、29年間で確認したところ、第2番目に供給量が少ない年は平成7～8年となり、現行フルプランにおいて設定した年と同じであることが確認された。

## 2 建設事業の進捗状況について

現在、筑後川水系フルプランに記載されている建設事業は6事業である。このうち佐賀導水事業は完了しており、福岡導水事業、大山ダム建設事業、筑後川下流土地改良事業、小石原川ダム建設事業、両筑平野用水二期事業は事業実施中である。なお、小石原川ダム建設事業についてはダム事業の検証に係る検討を実施しているところである。

## 3 その他重要事項の進捗状況について

その他重要事項については、本部会資料で示したとおり、それぞれの項目に対応した様々な取組みが行われている。

例えば、水源地域の開発・整備及び流域内外の地域連携を通じた活性化の取組みについては、水源地の森林保全支援活動、関係住民の上下流交流会、河川美化活動が行われている。その他にも、筑後川の河川環境の保全の取組みとしては、松原ダムの弾力的管理が行われており、筑後・佐賀平野における地盤沈下対策としては、筑後・佐賀平野地盤沈下防止等対策要綱に基づいて規制地域や観測地域が設定され、定期的に調査が行われており、また、水資源の合理化にあたっての施策としては、節水の普及啓発や既存水利の有効利用等が行われている。

## II 次期フルプラン策定に向けて

筑後川部会において、社会的、経済的な影響による水需要の変化や気候変動による供給能力の低下など需給状況が変化してきているとの認識が示された。

このような状況に鑑み、今後、総合的な水資源管理に重点を置いて、次期フルプラン策定に向けて取り組んでいく。

### 1 需給計画について

水道用水については、一日平均取水量等は微増を示し、一日最大取水量は横ばい傾向を示しているが、この傾向が今後も続くのか需要動向を把握し、引き続き調査・検討していく。

工業用水については、工業出荷額は増加しているが、使用水量は横ばいから減少が見られるため、今後の需要動向及び工場誘致等の状況を把握し、引き続き調査・検討していく。

農業用水については、現行フルプラン策定後も増加傾向を示しているが、この傾向が今後も続くのか、需要動向を把握し、引き続き調査・検討していく。

供給については、気候変動や水を供給するための施設の老朽化により供給能力が低下していく可能性も踏まえ、調査・検討していく。

### 2 建設事業について

建設事業は、事業が完了し効果が発現されているものから、現在事業実施中のものまで様々な状況である。現在事業実施中のものについては、事業の進捗状況や効果を把握していく。

### 3 その他重要事項について

#### (1) 筑後川水系特有の課題について

次期フルプラン策定に向けて、筑後川水系特有の以下のような課題について、取り組んでいく必要がある。

- ・筑後大堰の魚類等の遡上状況について、専門家等の意見を踏まえて今後も調査・分析していくこと。
- ・白石平野では、地盤沈下抑制の観点において、地下水から地表水への早期転換を進めること。
- ・河川水だけに頼るのではなく、地域性を考慮しつつ、雨水・再生水・海水の利用を図ること。
- ・流域外の利水者が流域に対して負担や貢献をしていることを見えるようにすること。

#### (2) その他、総合的な水資源管理の推進について

次期フルプラン策定に向けて、筑後川部会からいただいた今後の水資源政策に関する意見を踏まえて、以下を含む課題にも適宜留意しつつ、地域性を踏まえながら関係者と連携し、総合的な水資源管理を推進していく必要がある。

- ・安定的な水の供給を確保するために、既存施設のストックマネジメント（定期的な点検、適切な維持管理等）や、水資源施設の効率的な運用を進めること。
- ・災害リスクについては、事前に対処を考えておくこと。例えば、災害対策について、耐震化だけではなく、必要に応じて、水供給経路の複数化を図るなどの検討を進めること。
- ・地球温暖化に伴い、洪水や渇水の発生頻度の増加が懸念されることから、流量予測精度の向上に努めるとともに、治水・利水両面でダムの効力をさらに発揮できるように、弾力的な運用を図ること。
- ・地下水の利用にあたって、水量・水質・地盤沈下状況等を考慮した上で、地表水と併せた一体的な管理に向けて検討していくこと。
- ・地下水を取水する場合、地下水を公水（公共の水）として捉え、地域への還元や社会貢献、水道事業の維持管理費の負担なども考えていくこと。
- ・気候変動による渇水発生や蒸発散の増加による、利用可能な水量の減少に対応するとともに、我が国の食料自給率の向上のため、地域で必要な農業用水の確保についても検討していくこと。
- ・河川の環境維持用水は重要である。また、流域住民の河川環境への関心の高まりにより、河川の環境維持用水がこれまで以上に必要となることが予想されるので、今後、水利用が制限されることも考慮すること。
- ・節水について、ハード対策だけではなく、渇水ピークを緩和させるための適切な情報提供などのソフト対策も進めること。
- ・水系の幅広い関係者の、水への親しみが深まり、関心が高まるように、水系の個性をわかりやすく示すなど、情報の普及に努め、水資源を大切に使うという動機づけとなるよう、工夫していく必要があること。
- ・ローカリティ（流域や地域の実情）という観点から、地域特性に応じた今後の水利用について考えていくこと。

# 筑後川水系における水資源開発基本計画

## 1 水の用途別の需要の見通し及び供給の目標

筑後川水系に各種用水を依存している福岡県、佐賀県、熊本県及び大分県の諸地域において、平成 27 年度を目途とする水の用途別の需要の見通し及び供給の目標はおおむね次のとおりである。

また、経済社会の諸動向並びに水資源開発の多目的性、長期性及び適地の希少性に配慮しつつ、これらを必要に応じて見直すものとする。

### (1) 水の用途別の需要の見通し

水の用途別の需要の見通しは、計画的な生活・産業基盤の整備、地盤沈下対策としての地下水の転換、合理的な水利用等を考慮し、おおむね次のとおりとする。

筑後川水系に水道用水または工業用水を依存している諸地域において、水道事業及び工業用水道事業がこの水系に依存する需要の見通しは毎秒約 10.4 立方メートルである。このうち、この水系に水道用水を依存している福岡県、佐賀県、熊本県及び大分県の諸地域において、水道事業が依存する需要の見通しは毎秒約 8.2 立方メートルであるとともに、この水系に工業用水を依存している福岡県、佐賀県及び熊本県の諸地域において、工業用水道事業が依存する需要の見通しは毎秒約 2.2 立方メートルである。

また、筑後川水系に農業用水を依存している福岡県及び佐賀県の諸地域において、農業基盤の整備に伴って増加する農業用水の需要の見通しは毎秒約 0.1 立方メートルである。

### (2) 供給の目標

これらの水の需要に対し、近年の降雨状況等による流況の変化を踏まえた上で、地域の実状に即して安定的な水の利用を可能にすることを供給の目標とする。このため、2 に掲げる施設整備を行う。

2 に掲げる水資源開発のための施設とこれまでに整備した施設等により、供給が可能と見込まれる水道用水及び工業用水の水量は、近年の 20 年に 2 番目の規模の渇水時における流況を基にすれば毎秒約 11.0 立方メートルとなる。なお、計画当時の流況を基にすれば、その水量は毎秒約 13.4 立方メートルである。

また、農業用水の増加分として毎秒約 0.1 立方メートルを供給する。

## 2 供給の目標を達成するため必要な施設の建設に関する基本的な事項

先に示された供給の目標を達成するために次の施設整備を行う。

なお、社会経済情勢の変化を踏まえ、今後も事業マネジメントの徹底、透明性の確保、コスト縮減等の観点を重視しつつ施設整備を推進するものとする。

### (1) 福岡導水事業

事業目的 この事業は、取水施設及び水路等を建設することにより、福岡市及びその周辺地域に対し水道用水を供給するものとする。

なお、この事業の実施に当たっては、筑後川下流部の水産業及び淡水取水に及ぼす影響について十分配慮するものとする。

事業主体 独立行政法人 水資源機構

河川名 筑後川

最大取水量 毎秒約 2.8 立方メートル

予定工期 昭和 48 年度から平成 24 年度まで

### (2) 大山ダム建設事業

事業目的 この事業は、洪水調節及び流水の正常な機能の維持を図るとともに、福岡県の水道用水を確保するものとする。

事業主体 独立行政法人 水資源機構

河川名 赤石川

新規利水容量 約 6,300 千立方メートル

(有効貯水容量約 18,000 千立方メートル)

予定工期 昭和 58 年度から平成 24 年度まで

### (3) 佐賀導水事業

事業目的 この事業は、筑後川、城原川及び嘉瀬川を連絡する流況調整河川を建設することにより、洪水調節、佐賀平野の内水排除、佐賀市内河川の水質浄化及び流水の正常な機能の維持を図るとともに、佐賀県の水道用水を確保するものとする。

事業主体 国土交通省

河川名 筑後川、城原川及び嘉瀬川

最大導水量 毎秒約 2.3 立方メートル

(内水排除時毎秒約 30.0 立方メートル)

予定工期 昭和 49 年度から平成 20 年度まで

#### (4) 筑後川下流土地改良事業

事業目的	この事業は、水路等を建設し、クリークの統廃合整備を行うことにより、淡水取水の合理化を図るとともに、筑後川下流用水事業とあいまって、福岡県及び佐賀県の筑後川下流地区の農地に対して必要な農業用水の確保及び補給を行うものとする。
事業主体	農林水産省
河川名	筑後川
クリーク水路延長	約 172 キロメートル
予定工期	昭和 47 年度から平成 23 年度まで

#### (5) 小石原川ダム建設事業

事業目的	この事業は、洪水調節及び流水の正常な機能の維持(異常渇水時の緊急水の補給を含む)を図るとともに、福岡県の水道用水を確保するものとする。
事業主体	独立行政法人 水資源機構
河川名	小石原川
新規利水容量	約 4,600 千立方メートル (有効貯水容量約 39,100 千立方メートル)
予定工期	平成 4 年度から平成 27 年度まで

これらの事業に加え、既に完成した施設のうち次の改築事業を行う。

#### 両筑平野用水二期事業

事業目的	この事業は、両筑平野用水施設の改築を行うことにより、福岡県の農業用水、水道用水及び工業用水並びに佐賀県の水道用水の供給のための水路等の機能回復を図るものである。
事業主体	独立行政法人 水資源機構
河川名	小石原川及び佐田川
江川ダム利水容量	約 24,000 千立方メートル(有効貯水容量約 24,000 千立方メートル)
予定工期	平成 17 年度から平成 25 年度まで

### 3 その他水資源の総合的な開発及び利用の合理化に関する重要事項

- (1) この水系に各種用水を依存している諸地域において、適切な水利用の安定性を確保するため、需要と供給の両面から総合的な施策を講ずるものとする。

- (2) 水資源の開発及び利用の合理化に当たっては、水源地域の開発・整備及び流域内外の地域連携を通じた地域の特色を活かした活性化を図ること等により、関係地域住民の生活安定と福祉の向上に資するための方策を積極的に推進するとともに、ダム周辺の環境整備、水源の保全かん養を図るための森林の整備等必要な措置を講ずるよう努めるものとする。
- (3) 水資源の開発及び利用の合理化に当たっては、流域での健全な水循環を重視しつつ、治水対策に十分配慮するとともに、適正な土砂管理及び河川環境の保全に努め、下流既得水利、水産業、特にのり漁業等に影響を及ぼさないよう十分配慮するものとする。さらに、既設ダム群等の有効活用により適正な流況の保持に努めるなどの筑後川の適切な水管理を図り、これにより、有明海の環境保全にも資するよう努めるものとする。
- (4) この水系に各種用水を依存している諸地域においては、一部の地域で過去に地下水の採取により著しい地盤沈下が発生し、現状では沈静化傾向にあるものの、依然として地下水に対する依存度が高いことから、安定的な水の供給を図りつつ、地下水が適切に利用されるよう地下水採取の規制、地下水位の観測や調査等を引き続き行うこととする。
- (5) 水資源の開発及び利用の合理化に当たっては、次の施策を講ずるものとする。
- ① 漏水の防止、回収率の向上等の促進を図るとともに、節水の普及啓発に努めるものとする。
  - ② 生活排水、産業廃水等の再生利用のための技術開発等を推進し、その利用の促進を図るものとする。
  - ③ 生活環境の整備に伴い増大する下水処理水と河川流水を総合的に運用する施策を推進するものとする。
  - ④ 近年の経済社会の発展に伴う土地利用及び産業構造の変化に対応し、既存水利の有効かつ適切な利用を図るものとする。
- (6) 渇水に対する適正な安全性の確保のため、異常渇水対策の推進とともに、既存施設の有効活用方策、各利水者の水資源開発水量等を適正に反映した都市用水等の水利用調整の有効性等及びこれまでの地域における水利用調整の考え方等について総合的に検討し、その具体化を図るものとする。
- (7) 水資源の開発及び利用の合理化に当たっては、水質及び自然環境の保全に十分配慮するとともに、水環境に対する社会的要請の高まりに対応して水資源がもつ環境機能を生かすよう努めるものとする。
- (8) 本計画の運用に当たっては、各種長期計画との整合性、経済社会情勢及び財政事情に配慮するものとする。

筑後川水系における水資源開発基本計画 説明資料 (1)  
 (都市用水(水道用水及び工業用水)の県別・用途別需給想定一覧表)

【需要】

(単位:m<sup>3</sup>/s)

H27	用途	水道用水					工業用水					都市用水
	県名	福岡	佐賀	熊本	大分	小計	福岡	佐賀	熊本	大分	小計	合計
筑後川水系への依存量		5.92	1.69	0.08	0.51	8.20	0.70	1.25	0.20	0.00	2.15	10.35
他水系への依存量		8.22	1.30	0.00	0.00	9.52	0.57	0.15	0.00	0.00	0.72	10.24
総量		14.14	2.99	0.08	0.51	17.72	1.27	1.40	0.20	0.00	2.87	20.59

【供給】

(単位:m<sup>3</sup>/s)

H27	用途		水道用水					工業用水					都市用水 合計		
	事業名	県名	福岡	佐賀	熊本	大分	小計	福岡	佐賀	熊本	大分	小計	計画供給量	安定供給可能量 (近2/20)	近年最大渇水時供給可能量(H6~H7)
開発 予定 水量			新規	大山ダム	1.31	-	-	-	1.31	-	-	-	-	0.00	1.31
	佐賀導水	-		0.65	-	-	0.65	-	-	-	-	0.00	0.65	0.48	0.35
	小石原川ダム	0.65		-	-	-	0.65	-	-	-	-	0.00	0.65	0.48	0.21
	小計	1.96		0.65	0.00	0.00	2.61	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.61	1.85	0.73
	既計画で 手当済み	両筑平野用水	1.01	-	-	-	1.01	0.17	-	-	-	0.17	1.18	0.87	0.39
		寺内ダム	2.45	1.20	-	-	3.65	-	-	-	-	0.00	3.65	2.67	1.19
		筑後大堰	0.23	0.12	-	-	0.35	-	-	-	-	0.00	0.35	0.19	0.13
		竜門ダム	-	-	-	-	0.00	0.53	-	0.63	-	1.16	1.16	1.16	0.24
		松原・下釜ダム再開発	-	-	-	0.10	0.10	-	-	-	-	0.00	0.10	0.10	0.05
		耳納山麓土地改良	0.48	-	-	-	0.48	-	-	-	-	0.00	0.48	0.41	0.13
	小計	4.17	1.32	0.00	0.10	5.59	0.70	0.00	0.63	0.00	1.33	6.92	5.40	2.13	
	その他事業	山神ダム	0.29	-	-	-	0.29	-	-	-	-	0.00	0.29	0.14	0.04
	小計	6.42	1.97	0.00	0.10	8.49	0.70	0.00	0.63	0.00	1.33	9.82	7.39	2.90	
自流		1.19	0.47	0.00	0.20	1.86	0.00	1.25	0.00	0.00	1.25	3.11	3.11	3.11	
地下水		0.12	0.00	0.00	0.11	0.23	0.01	0.00	0.00	0.00	0.01	0.24	0.24	0.24	
その他		0.06	0.00	0.08	0.10	0.24	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.24	0.24	0.24	
合計(筑後川水系)		7.79	2.44	0.08	0.51	10.82	0.71	1.25	0.63	0.00	2.59	13.41	10.98	6.49	
他水系		9.94	1.44	0.00	0.00	11.38	0.57	0.15	0.00	0.00	0.72	12.10	10.44	8.47	
総量		17.73	3.88	0.08	0.51	22.20	1.28	1.40	0.63	0.00	3.31	25.51	21.42	14.96	

[需給想定調査等を基に作成]

(注)

- 1: 水道用水及び工業用水の水量は、それぞれ一日最大取水量である。ただし、両筑平野用水事業による開発水量のうち、福岡市水道用分水は、期別の最大値がある8月の月平均開発水量である。
- 2: 水道用水の水量は簡易水道分を含んでいる。また、福岡県の一部に専用水道分を含んでいる。
- 3: 「安定供給可能量(近2/20)」とは、近年の20年に2番目の規模の渇水において、河川に対してダム等の水資源開発施設による補給を行うことにより、年間を通じて供給が可能となる水量のことであり、筑後川水系において近年2/20に相当する渇水は、平成7年～平成8年である。
- 4: 「近年最大渇水時供給可能量(H6~H7)」とは、近年の20年で最大の渇水であった平成6年から平成7年において、河川に対してダム等の水資源開発施設による補給を行うことにより、年間を通じて供給が可能となる水量のことであり、
- 5: 「安定供給可能量(近2/20)」及び「近年最大渇水時供給可能量(H6~H7)」とは、一定の前提条件の下でのシミュレーションをもとにした供給可能量である。
- 6: 「竜門ダム」に水源として依存する水量は、筑後川水系分として整理している。
- 7: 「その他事業」の「山神ダム」は、福岡県の事業である。
- 8: 「その他」とは、ダム等の水資源開発施設、自流及び地下水以外により供給される水(湧水等)である。
- 9: 熊本県においては、近年の企業の立地動向等を踏まえつつ、将来における地域の発展に寄与するため、既に水源手当てされている水量を引き続き保持することとしている。
- 10: 四捨五入の関係で合計が合わない場合がある。



## 筑後川水系における水資源開発基本計画 説明資料 (2)

### 〈農業用水の県別需給想定一覧表〉

#### 【需要】

(単位:m<sup>3</sup>/s)

H27(新規需要)	用途	農業用水				
	県名	福岡	佐賀	熊本	大分	小計
新規需要想定		0.14	-	-	-	0.14

#### 【供給】

(単位:m<sup>3</sup>/s)

H27	用途	農業用水				
	事業名 \ 県名	福岡	佐賀	熊本	大分	小計
新規	筑後川下流土地改良	0.14	-	-	-	0.14
開発水量 (既計画で 手当済み)	耳納山麓土地改良	0.91	-	-	-	0.91
	竜門ダム	-	-	4.59	-	4.59
	両筑平野用水	2.51	-	-	-	2.51
	小計	3.42	-	4.59	-	8.01
合計		3.42	0.00	4.59	0.00	8.15
		0.14				

注1 : 上記表中の農業用水の水量は、夏期かんがい期間における平均取水量である。

注2 : 「新規需要想定」と「筑後川下流土地改良」の欄における水量0.14m<sup>3</sup>/sは福岡県と佐賀県にまたがっている水量であり、両県で明確に分離できないため、上記の表のように記述している。

注3 : 供給の合計の欄のうち、福岡県と佐賀県における下段の0.14m<sup>3</sup>/sは、「筑後川下流土地改良事業」による確保水量であり、福岡県と佐賀県にまたがる水量である。

注4 : 「竜門ダム」による供給水量4.59m<sup>3</sup>/sは、「菊池台地地区」及び「玉名平野地区」におけるかんがい用水として開発された水量である。